

日本赤十字臨床衛生検査技師会誌

日 赤 検 査

The Journal of Red Cross Medical Technologists

1985 第17号

目 次

〔特別寄稿〕

田中昇先生、国際細胞学アカデミー Maurice Goldblatt 細胞学賞の受賞決定について……………成田赤十字病院	吉 岡	稔	1
追悼 鈴木兼五郎先生……………成田赤十字病院	吉 岡	稔	3
故 鈴木兼五郎検査課長を偲んで……………大森赤十字病院	川 田 菊	江	4
追悼 大阪赤十字病院検査部 RI 係長 辻敬造先生……………成田赤十字病院	吉 岡	稔	7
辻 敬造氏を偲んで……………大阪赤十字病院	大 西 将	則	7
辻さんと共に……………大阪赤十字病院	山 下	一	8

〔研 究〕

Hairy cell leukemia の細胞化学的検討……………深谷赤十字病院	橋本 達也ほか	9
8;21 転座型急性骨髄性白血病の染色体および形態に ついて—核型と形態との比較検討—……………深谷赤十字病院	橋本 達也ほか	12
アメーバ赤痢の 1 症例……………松山赤十字病院	中野久美子ほか	17
各種血液疾患におけるヘモグロビン F 値について……………深谷赤十字病院	橋本 達也ほか	19
サイクロモン (promotin) の血小板凝集に及ぼす影響……………松山赤十字病院	海藤 秀敏ほか	22
突発性難聴 1 症例の平衡機能の検討……………静岡赤十字病院	金原比良男ほか	25

〔報 告〕

昭和59年度全国赤十字臨床衛生検査技師会業務連絡会議 研修総会議事録要旨……………	事務局	33
第14回赤十字東北ブロック研修会報告……………秋田赤十字病院	猪 岡 文之助	37

〔雑 感〕

第16回日赤臨床衛生検査技師会東部ブロック研修会に 参加して……………日本赤十字社医療センター	村 田 松 雄	38
日本赤十字臨床衛生検査技師会役員名簿……………		39
日本赤十字臨床衛生検査技師会会則……………		40

日本赤十字臨床衛生検査技師会

【特別寄稿】

田中 昇先生, 国際細胞学アカデミー Maurice Goldblatt 細胞学賞の受賞 決定について

成田赤十字病院

吉 岡 稔

このたび田中昇先生には, 国際細胞学アカデミー Maurice Goldblatt 細胞学賞の受賞が決定されました。

先生の永年にわたる細胞診断学の進歩への貢献と2つのご研究“画像解析にもとづく癌細胞診断の自動化”と“癌患者リンパ球の電子スピン共鳴による解析”によるものと伺いました。

技師会員一同に代わりまして心からお慶び申し上げます。

田中先生には技師会の発足にあたりましては, 当時赤十字中央病院検査部長としてご在職中で, 大変なお力添えを戴きました。技師会が設立されてからは会の運営につきましてご指導を戴きました。

先生が千葉県がんセンター研究所長にご就任されてから, 技師会は先生のご助言を戴いてまいりました。

昨年長岡で開催されました第3回日本赤十字臨床衛生検査技師学会では, 先生に特別講演をお願い致しました。演題は今回のご受賞に関連のある(癌の細胞診断自動化: 実用化への見通し)でございました。

先生と私たち技師会のご縁の深いことがあらためて認識されました次第でございます。

先生にはご受賞を契機とされまして, これからも一層のご活躍をお祈り申し上げます。

また, 先生には昭和61年秋期の日本細胞学会の学会長として, ご準備にお忙しいことと存じますが, 先生の益々のご健康をお祈り申し上げ

ます。

—国際細胞学アカデミー Maurice Goldblatt 細胞学賞について—

International Academy of Cytology (IAC) は, 主として癌細胞学についての研究を対象とする国際学会で, 1957年発足, 事務局はカナダ・ケベック市にあります。学術的な本部は大学内にあります。Goldblatt 氏はシカゴの財閥で多額の私財を癌研究助成に投じ財団を設立し, シカゴ大学を中心に建物, 設備の整備に貢献した人です。その財団の資金の一部をもって, 世界中の癌の細胞学を研究している学者のなかから顕著な業績をあげ細胞学の発展に貢献した学者を毎年1名選びシカゴ大学と共同で Maurice Goldblatt 賞を授与しています。

田中先生が1985年度を受賞者に選ばれ, 学会からの6月27日付の公文書で連絡を受けられました。

授賞式は来年1986年5月, ブリュッセルで開催されます IAC 総会で举行されます。

賞状, メダル, 賞金を受けられ, 受賞記念講演をされることになっておられます。

これまでの受賞者のなかには細胞核 DNA の顕微分光測光法を開発された, スーデン・カロリンスカ研究所の Caspersson 博士らノーベル賞候補級の学者の方も含まれており, 内容, 格式の高い賞であります。現在まで27名の受賞者のうち1977年に癌研院長の増淵先生が受賞され, 日本人では先生が3番目の受賞となられま

した。

先生のご研究のなかで、日本赤十字医療センターにご在職中1967年から共同研究を続けられました“画像解析にもとづく癌細胞診断の自動化”と、千葉県がんセンターに移られてから共同研究で開始されました“癌患者リンパ球の電子スピン共鳴による解析：ヘマトポルフィリンDの導入による診断への実用化と新しい癌マーカーの検出”が授賞の対象になられたのであります。なお、両研究とも厚生省癌研究助成金及び対癌10カ年総合戦略（「中曽根プロジェクト」といわれています）のなかで行われています。

この研究の共同研究者の上野哲夫、池田栄雄両主任技師は、田中先生とともに日本赤十字医療センターから千葉県がんセンターに移られました。お二人ともご在職当時は技師会の副会長、幹事を担当されご活躍されました。

このたびのご受賞にご貢献されました、共同研究者のお二人にお慶び申し上げます。

また今回の研究の施設として、日本赤十字医療センターと千葉県がんセンター研究所が海外にも認識され、国際的に高く評価されましたことは誠に心強い限りでございます。

今回のご受賞のご紹介を申し上げ、心からお慶び申し上げます。

-----【特別寄稿】-----



故 鈴木兼五郎先生

追悼 鈴木兼五郎先生

成田赤十字病院

吉 岡 稔

前日本赤十字臨床衛生検査技師会長、鈴木兼五郎先生が急逝されました。

4月27日大森赤十字病院に入院され、病院、家族の皆様の手厚い治療と看護を受けられましたが、5月7日に逝去されました。

私たちにとりまして、あまりにも突然のことであり、ご家族のお悲しみにお悔みの言葉もございませんでした。

先生には昭和39年技師会設立への運動が始まりましたところ、新宿赤十字産院にご勤務中でありましたが、日常の業務でお忙しいなかを、設立に向けて活躍され、昭和40年、技師会設立後は技師会の運営に献身されました。

初代の技師会長の 斉藤 誠二 先生の信頼が厚く、鈴木先生もよく斉藤会長の期待に応じて活躍されました。昭和46年斉藤会長の辞任により会長に就任されました。昭和51年新宿産院より大森赤十字病院に移られ、昭和52年勤務の都合上退任されるまで、会長として技師会の基礎を固められ、研修会を開催し、技師の学術、技術の向上のため努力されました。

会長退任後も引き続き、総務、会計を担当され、技師会のアンケートの集約等に技師会運営のために力をつくされました。勤務でお忙しいなかで、新しい検査の導入に努められ、研鑽を積み、数々の学会発表もされました。後進の教育のためにも力を入れられて、勤務の終了後、技師学校で血液学の講義もされておりました。

今日医療をとりまく情勢は厳しくなり、赤十字病院検査部としても大事な時期を迎えております。このような時期に鈴木先生を喪なされたことは誠に残念なことでございます。

先生にお会いすると、何時もニコニコと笑顔で片手を上げられて挨拶されることでした。またお酒も強くて、会議の後ではよく立寄り、話合ったものでした。懇親会の席で歌の指名を受けられますと、直立の姿勢でよく通る声で“同期の桜”を歌われました。

第2次大戦の昭和18年に予科練を志願し、戦争末期の厳しい訓練を受け、特攻隊として一期先輩を送り、卒業を目前にして終戦となり復員された当時の想いがこめられているようでした。戦争中の体験が何事にも全力をあげて取り組まれるもとなっていたと存じました。ご家庭には臨床検査技師の奥様との間にご子息が一人おられ、歯科医師として、社会で活躍されておられます。また、孤児になられた親類のお二人の遺児を引き取られ、親代わりとして養育され、暖かい家庭を築かれてまいりました。ご家族の皆様とこれからの人生を楽しまれるとき、突然病に倒れられましたことは誠に残念なことでありました。

私たち技師会員一同は、先生のご遺志を引き継ぎ、技師会発展のために努力致したいと存じております。ご遺族の皆様にご心からお悔み申し上げ、謹しんで鈴木兼五郎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

【特別寄稿】

故 鈴木兼五郎検査課長を偲んで

大森赤十字病院

川田 菊江

4月28日ゴールデンウィークの初日、しかも日曜日とあって夕食後のんびりとテレビの画面に見入っていた午後8時過ぎ突然鳴った電話のベルに虚をつかれ、慌てて受話器を取った。

「もしもし緊急連絡です」と電話の向こうの声は中島部長でした。octave（オクターブ）落したような、しかもかなり口早に、「課長さんが心停止したそうです。今から病院に行きます。あなたもすぐに行ってください。では病院で」と一気にこれだけいって電話は切れた。私はしばし茫然としていた。それから何秒、何分が経ったかわからないが、我にかえり仕度をして外に飛び出しタクシーを拾って病院にかけつけた。“病院”，もちろん勤務先の大森赤十字病院です。何故ならば、鈴木課長はこのころ、めずらしく風邪声をしていました。内科に受診したようですが風邪ということで休むほどではなかったということでした。そして4月26日（金）午後4時ごろ私のところに「お先に失礼する」といって来られたので「具合が悪いですか」と尋ねると「いや、ちょっと」という返事だったので「無理しないで明日は土曜日ですし休んでください」というとニコニコしながら部屋を出て行かれた。

しかし、それから20～30分後中島部長から、「課長さんが入院することになりましたから」と連絡があり、急いで部長の部屋に走った。肺炎とのことでした。鈴木課長は私の部屋を出てから中島部長のところに同じような挨拶に行った丁度そのとき内科の先生がおられて診てくだ

さったそうです。診察の後 WBC を調べたところ、10,900あったため引き続き緊急で胸部 X-P をとり、その場で肺炎と診断され急遽入院となった訳でした。私たちは身体の具合が悪くて定時より早く帰るのだとばかり思っていました。が、実はその日も学校（日本医学技術専門学校）の授業があったためだったと後日聞きました。したがって、課長自身もよもやここで入院などとは夢にも考えていなかったことだったろうと思います。これが4月26日（金）午後5時30分ごろのことでした。

新宿産院から大森日赤に移ったのが昭和51年6月、それから約9年間に病欠は1日もなく風邪すらひいたことのない課長の入院を知った人々は、誰しもが驚いたほど日頃元気でした。

入院した翌27日（土）も朝から元気に検査に降りて来ていた。午後私たちが仕事を終わって帰るときも相変わらず元気で、何一つ変わった様子は見られなかった。この分なら連休明けには退院できるだろうと話しながら各々が帰宅した。そしてその翌4月28日（日）午後6時40分ごろ入院中の内科病棟のベッド上で激しい嘔吐とともに意識を失い、一時呼吸が停止したということでした。この時点で緊急検査の呼び出しがあった。当院では検査関係は2次救急当直以外当直制度はないため、この大型連休に備え中島部長と相談のうえ、独自の緊急連絡網を作り病院に届出をしておいた。

しかし、この緊急呼び出しの第1号が奇しくも鈴木課長であったとは全く神のみ知るところ

である。私たちがかけつけたとき 課長は C-T 室に降りていた。あまりにも変わり果てた姿に皆唖然とした。C-T の結果「くも膜下出血」、しかも手術も不可能ということでまさに“万事休す”である。本当に思いもかけない突然の出来事で、緊急連絡を受けてかけつけた中島部長はじめ検査部職員皆頭をかかえ、顔を見合わせてはただ溜息をつくばかりで、成す術もなかった。

前述のとおり誰もが羨むほど日頃の鈴木課長は一見健康そのものに見えた。しかし、倒れてからご家族の方や昔からの知人の方のお話によると、元来が頭痛持ちでセデスを常用していたと聞いてこの意外な話に驚きました。課長の枕辺でこんなことを話しているうち、誰かが思い出したように“課長は前に C-T をとっている筈だ”といった。急に色めき立った。脳外科の部長が C-T 室の古い記録を探してくださった。そして見つかった。昭和 52 年当院に C-T が入って間もなくのことでした。結果は“経過観察”とあった。したがって、その時点では特別にはっきりとした所見はなかったようでした。それから後、周囲で再三再四検査をすすめたにも拘らず専らセデスを常用していたという話だった。入院したといっても昨日まではあんなに元気だったあの課長が、自己の意志もなく呼吸しているこの変わり果てた姿は本当に信じられない。とにかくどうすることも、どうしてあげることもしないまま午前 1 時過ぎ私たちは一旦家に帰った。

翌 29 日は祝日だった。朝食の後、“病院へ”，誰も考えることは同じで検査部の職員も一人二人と集まって来た。奇跡を念じて病室に行ってみたが相変わらず 課長はただ眠り続けている。出血と同時にもう既に脳死の状態といわれた。レスピレーターだけが規則的な音をたてて動いているのが全く空しく感じられた。5 月 6 日までの飛び石連休の間、依然として同じ状態が続いていたため、検査部全員釘づけとなり電話のベル一つにも全神経を集中させるような毎日だった。

そして連休の終わった 5 月 7 日午後 10 時 40 分遂に帰らぬ人となった。

鈴木課長は東京生れで、12 人兄弟の 5 番目に生れたところから「兼五郎」という名前がつけられたのだそうで、“兼”という字には特別の意味はないのだと在りし日に私に語ったことがありました。それから字も姓名も全く同じもう一人の鈴木兼五郎さんという人が茨城県に居られるそうで、これは電話帳で知ったそうです。そして筑波万博にでかけご対面するのだと、とても楽しみにしていたようですがそれも果たせず逝ってしまった。

それから課長は“酒”が好きでした。病院の色々な行事で飲んでいるときなど、お酌にまわって「何を飲んでいるんですか？」と聞くと、「もう三種混合だよ」という。なるほどテーブルの上には、日本酒、ビール、ウイスキー、はたまた焼酎すら並んでいることがある。大変陽気な酒飲みだった。酔うほどに楽しさを増し、独特な甲高い声で“戦友”や“ラバウル小唄”等を歌って盛んに気炎をあげる。そして宴会が終わり、席を立つと必ず大きな声をはりあげて「気をつけ」「前へ進め」と号令をかける。その声を聞いて、“また始まったナ”と誰もが思いその日の宴の終わりを感じた。

学業半ばで予科練を志願し、軍隊に入ったという課長にとって、この軍隊生活は最も忘れ難い青春時代の一齣^{こま}だったのだと思う。そしてあの太平洋戦争を生き抜き、恵まれた体躯でしかも清廉で闊達だった彼の鈴木兼五郎検査課長も思いもよらぬ伏兵（くも膜下出血）によって技師生活 26 年、人生 57 年にして死を余儀なくされたことを思うと、まさに何をかいわんやである。

急変した 5 月 7 日中島部長は神経病理学会の発表者のためどうしても出席しなければならず、「帰るまでずっと待っていてくださるでしょう」と心を残しながら、ぎりぎりの時間に岡山へ発たれたばかりだった。

すべての処置が終わり、課長の遺体が霊安室に降りたのは午前 0 時を回っていた。それから

ご家族の方々が集まり打合せが始まった。私たちはその結論の出るのを待った。段取りが決定したのは午前4時ごろになってしまった。

それによると、5月8日；通夜、同9日；告別式……もう既に5月8日であった。通夜、告別式ともに当院から歩いて3～4分のところにある光教寺という寺で行われることになった。

中島部長留守の今、私は総指揮を取らなければならなかった。ぼーとした頭で何をどうしたらよいのかわからなかった。

思えばこの10日間不安と緊張に満ちた日々だった。そして今その終焉を迎えたことで誰もが疲労困憊の極限に達していた。

皆に助けられ、当検査室として取るべき段取りについての手筈が整い、それぞれ着替えや準備があるため、午前5時近く一旦家に帰ることとした。遂に一睡もしない一夜が明けた。家で待機していた他の職員も、決して枕を高くしてやすむことはできなかっただろうと思う。

5月8日(水)、1週間のうち最も忙しい日である。昨夜…というより今朝方決めた役割、受付、案内係、連絡係、通夜の接待係等をそれぞれに伝え、協力を求めた。業務の怠慢は許されない。お互いに協力し合ってフルスピードでまず仕事を終えることにした。私は電話の応待、来客等で目まぐるしいなかで今晚、明日の進行状況を考えることで精一杯であった。やがて午後7時より通夜が始まった。長い技師生活、日赤技師会の会長、現在では私と2人で技師会の会計を預かっているというようなことで、広い交際そして課長の人柄に対して実に多数の方が弔問に訪ずれてくださった。かくしてまずは通夜は無事に終わった。

5月9日(木)午後1時より告別式、業務のほうは約半数が残ри、他の者は告別式に参加した。幸い寺が近かったため、残った職員も全員

交代で課長に最後の別れをした。

この日の朝、中島部長も岡山からお帰りになった。私はほっとした。もちろん学会途中でお帰りのったのですが、後にお聞きしたお話によると大金の入ったお財布を紛失されたとのこと。東京を発たれてホテルに着いた途端に伝えられた課長の訃報に、お気持ちが動転されたのがよくわかった。幸い一緒だった大学の先生から借金をしてお帰りになったとのことでした。そしてこれもまた後日伺ったことですが、お財布はタクシーの中に落ちついて、ご奇特なこの運転士さんがなかの名刺を見て知らせてくださったとか、とにかくこのころは無我夢中で誰もが過ごしていた。

告別式も沢山の方々によって盛大に取り行われた。病院の計らいで本社より、「銀色有功賞」が贈られた。制度の変った現在では中々いただけないものだそうである。しかも、当院の勝山事務副部長の並々ならぬお骨折によって告別式に間に合せてくださった。課長の霊前に飾られたこの“勲章”は一段と輝き、鈴木課長の功績をより称えた。

1時間の告別式も終わりいよいよお別れのときが来た。いっぱいのお花に全身埋めつくされ、ご家族の方や周囲の人々の鳴咽のなかで見納めとなった。柩は検査部職員の手によって静かに運ばれた。課長もきっと喜んでくださったことだろうと思う。

入院からこの日このときまで、検査部の総勢24名一人一人のこの協力には中島部長ともども本当に心より頭を下げた。そして課長が逝って既に4カ月を過ぎた今も机の上にはお花のたえたことがない。

鈴木課長どうぞ安らかに眠りください。

昭和60年9月

【特別寄稿】



故 辻 敬造先生

追悼

大阪赤十字病院検査部 RI 係長

辻敬造先生

成田赤十字病院

吉 岡 稔

辻 敬造先生 略歴

大正 8 年 10 月 14 日 奈良県橿原市出垣内町にて出生

昭和 8 年 奈良県立香具山高等学校卒業

昭和 10 年 奈良県立薬学校卒業

昭和 14 年 兵役に服す

昭和 33 年 日本へ帰還

昭和 34 年 大阪赤十字病院へ就職

昭和 60 年 1 月 31 日逝去（享年 66 歳）

辻敬造先生は、昭和 14 年召集を受けて、中国戦線に従軍され、昭和 20 年の敗戦後、中国革命に衛生隊として留用され、中国成立後も引き続き中国の新中国の建設に参加し、昭和 33 年帰国後、大阪赤十字病院に就職され、検査技師として検査業務に精励され、新しい技術の導入に大いに貢献されました。

また、組合活動にも活躍され、大阪赤十字病院労働組合の執行委員長、全日赤の中央執行委員長として幅広い活躍をされました。

昭和 54 年 RI 検査係長として RI 検査に取り組み、新しい検査を積極的に導入され、今日の RI 検査室の基礎を築き上げられました。本年 3 月にご勇退し、新しい第 2 の人生を考えられておりましたが、昨年体の不調を訴えられ、2 度の手術の後の加療中のところ逝去されました。

ご遺族の皆様には、心からお悔み申し上げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

大阪赤十字病院検査部では、辻敬造先生を偲び大阪日赤検査部時報、特集号を発行されまし

た。数々の追悼の文章のなかから、大西将則さんと山下一さんの追悼文を転載させて頂きました。

辻 敬造氏を偲んで

大阪赤十字病院

大西 将則

昭和 60 年 1 月 31 日、永眠

私の知る限りほとんど病気をしたこともなく、強靱な体力をもって、明るく万年青年として親しまれてきた。その辻さんが病魔に勝つことができず、帰らぬ人となってしまった。ほんとうに悲しいことである。

昭和 33 年 4 月 10 日、衛生検査技師法が成立した年の 10 月に、検査部に就職された。翌年の 3 月に日本衛生検査協会と大阪細菌検査協会の主催による衛生検査技師試験受験対策講習会に、一緒に参加して勉強したことが古い思い出の一つとして、今でも心に残っている。

また、昭和 34 年に大阪細菌検査協会から独

立して、日本衛生検査協会大阪支部が発足した。当時常任委員（渉外部）として35年まで役員として活動された。現在の大阪府臨床衛生検査技師会の基礎を作られた一人である。

その後、全日赤中央執行委員長や大阪単組の執行委員長もされ、永年労働組合の役員としても活動された。

後、第一化学副室長で現在緊急検査室に勤務している福岡氏と永くコンビで仕事をしてこられた。検査技師として仕事に対する姿勢がすばらしく、よく学会、講習会にも参加し、常に新しい検査の開発に積極的に取り組まれていた。

現在のRI検査室は49年9月に完成し、当時は内科の所属であった。54年4月にRI検査室が検査部に編入された。当時、第一化学係長であった辻さんが、RI検査室の係長として行かれた。ここでも積極的に医師とコンタクトを取り、新しいRI検査（腫瘍マーカー）の開発に取り組まれ、学会にも多く発表された。現在のRI検査室に大きく貢献された人である。

人生は一幕の劇である。その主役として、時には脇役として、静かに人生の幕が降りた。

ほんとうに長い間ご苦労様でした。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

辻さんと共に

大阪赤十字病院

山下 一

昭和55年4月静岡で開かれた臨床検査技師会学会に、「フェリチンの測定と臨床的な意義」について辻さん、大西さんとともに、辻さんが基礎的なこと及び肝疾患との関係を、大西さんが血液疾患との関係について、小生はCMLの急性転化時におけるフェリチンの動きについて一緒に発表することになり、約半年かかって一緒に仕事をしたときが一番なつかしく思われる。

実験に接するときの辻さんの真剣な姿は今も

目に浮んでくる。フェリチン測定の原理を何回聞いても理解できない私に、「おまえさんが自分で理解しようとしなから！」と、何回しかられたことか、でも最後まで説明して下さったこともなつかしい思い出である。

学会場でも同席し、質問を受けてくださり、自分の発表が最後だったこともあって、大西さんの発表のときも十分に私たちを勇気づけてくださいました。

発表が終わり、帰路につく前、昼食をともに静岡名産の「うなぎの蒲焼」をあてにビールを飲みながら数時間例の調子で「おまえさんは、……」と、検査技師のあり方について聞かせて下さったこともついこの間のように思われます。

不思議なことに、辻さんが「ICUに入室された3日目の朝、「静岡の蒲焼屋さん」で話をしているときの夢を見ました。気になってICUに行ってみると、血圧が下がっていて話をする状態ではなく、その夜召されました。

辻さんとは昭和48年から仕事をともにし話し合ってきたが、常に私に色々なことを諭すように言い聞かせて下さいました。特にお子様のことで話されるときは、細い目を一層細くし頭に手をやり、丸い頭をなでながら話されたものでした。一検査技師が一生の仕事として様々な問題を一生懸命にやってこられ、これから花咲き、実を結ぶときになって亡くなられたことは本当に残念で仕様がな気がします。

もう少し私たち後輩の指導を願って頂きましたのに。「辻さんは私たちにとって大久保彦左衛門的な人かな？」とよくいったものです。

ともあれ私たち後輩に残して下さった財産を受け継ぎ、新しい時代21世紀の検査技師の発展のために大きく前進したいものです。

「辻さん本当におつかれ様でした。きっとご遺志を継ぐものとしてがんばって行きたいと思っています。」

最後にご冥福をお祈り致します。